

田辺市立美術館

本年度は特別展3回・小企画展1回・館藏品展1回の計5展覧会を計画しています。10月から12月にかけて開催する「野長瀬晩花展」は熊野古道なかへち美術館の開館10周年を記念する特別展で中辺路町近露出身の日本画家、野長瀬晩花の画業をたどる内容の展覧会です。本館・分館の合同で開催します。高村光太郎・智恵子夫妻と佐藤春夫との関係に焦点をあてる「智恵子抄～光太郎・智恵子と佐藤春夫～」展は春のGWをはさむ期間に、6月から9月はコレクションを中心に紹介する「近代洋画館蔵作品展」や「文人画館蔵作品展」の開催、年が明けて1月から3月には江戸時代に活躍した田辺出身の画家に注目する「真砂幽泉展」を開催するなど今年も必見の企画が続きます。

熊野古道なかへち美術館

熊野古道なかへち美術館では開館10周年を記念し、当地にゆかりのある2人の画家、渡瀬凌雲と野長瀬晩花にスポットを当てた特別展を春と秋に開催します。まず春には、昭和期の南画壇の重鎮であった渡瀬凌雲について、秀作記念作を中心に詳しく紹介します。大正期の京都画壇に新風を起した国画創作協会の創立会員のひとり、野長瀬晩花については、秋に画家の全体像を振り返る展覧会を開催して大きくとりあげます。本館との合同開催となり、前期・後期で作品を交換、入れ替えます。会期中には講演会も予定しています。このほか、夏休みの期間には、田辺市出身の彫刻家でグラフィックデザイナー、谷内庸生の作品を紹介します。特に紙の面白さに触れていただけるのではと思っています。展示とあわせて作家自身によるワークショップも予定しています。館藏品展では、雑賀清子の水彩および点描作品で熊野周辺地域をたどります。作品を楽しみながら、足元にある小さな自然を再発見したいと思います。

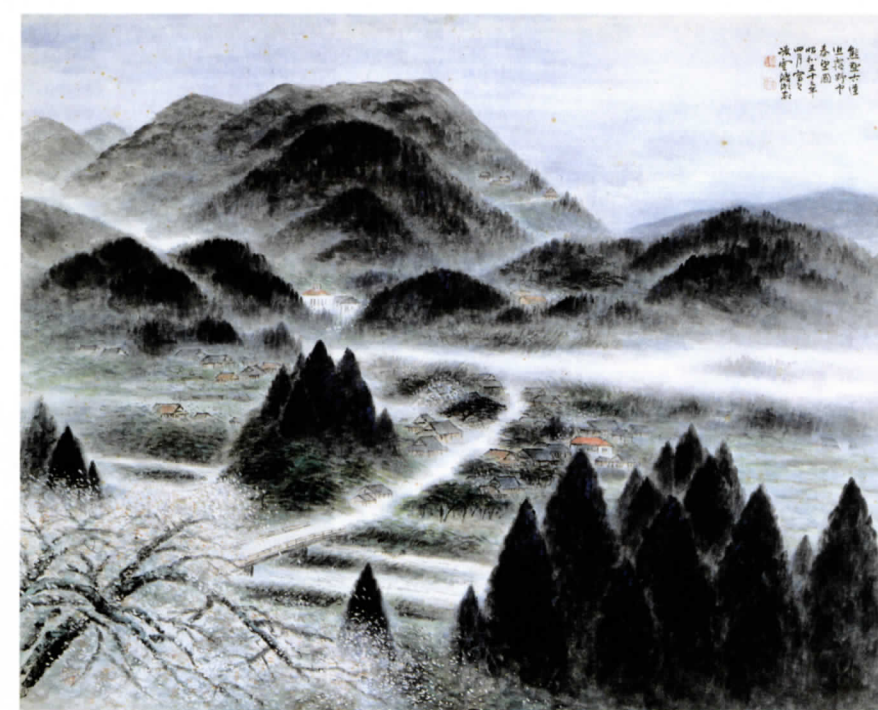


野長瀬晩花《女》  
1916(大正5)年頃 熊野古道なかへち美術館蔵

28ページ

# ORANGE

田辺市立美術館NEWS  
Vol.8



渡瀬凌雲《熊野古道近露野中春望図》 1978(昭和53)年 田辺市立近野小学校蔵

絵画と出会う「この一点!」

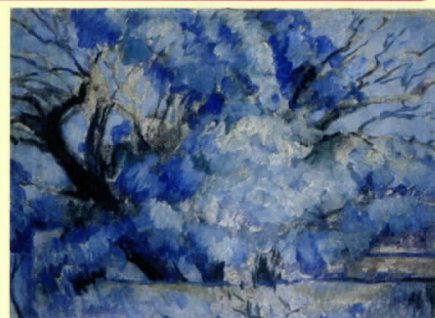
田辺市立美術館

特別展「智恵子抄～光太郎・智恵子と佐藤春夫～」 4月19日(土)～6月1日(日)

この作品の描かれた年の9月、ひと月を高村光太郎と長沼智恵子は上高地で過ごし、婚約する。しかし二人の幸福とはうらはらに、周囲にはゴシップがうずまき、結婚の話は難航する。この作品は12月に福島高等女学校時代の同級生の沼津の実家に滞在し、その庭から見える樟を描いたものだといふ。当時の心中はいかばかりだったのだろうか。結婚が認められるのはこの一年後である。

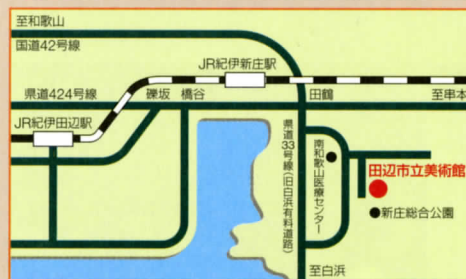
高村(長沼)智恵子は日本女子大学在学中に接した洋画に魅せられ、卒業後も反対する郷里の両親を説得し、東京に残って研究を重ねた。光太郎との出会い、結婚の後も創作は続くが、才能が十全に発揮されたのは、自己を喪失した後、亡くなる前の2年間に集中してつくられ光太郎に捧げられた、色紙をはさみで切り抜いて構成する「紙絵」の世界においてだった。

(学芸員 三谷 渉)



高村智恵子《樟》1913(大正2)年 清春白樺美術館蔵

利用案内



田辺市立美術館

■開館時間  
午前10時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)  
JR紀伊田辺駅から明光バス  
「新庄病院前」下車、徒歩5分。

〒646-0015  
和歌山県田辺市たきない町24-43  
TEL.0739-24-3770  
FAX.0739-24-3771



田辺市立美術館分館  
熊野古道なかへち美術館

■開館時間  
午前10時～午後5時  
(入館は午後4時30分まで)  
JR紀伊田辺駅から龍神バス  
「なかへち美術館」下車。

〒646-1402  
和歌山県田辺市中辺路町近露892  
TEL.0739-65-0390  
FAX.0739-65-0393

美術館あれこれ⑦ 展覧会の種類その1「常設展」

美術館で開催される展覧会の種類を大きく区分すると「常設展」と「特別展」に分けることができます。

「常設展」は一般的にその美術館がもつコレクションを系統的に継続して紹介するためのもので、例えば、それまでに収集した作品を洋画日本画などのジャンル毎にあるいは館の収集方針やテーマに基づいて展示したり、その年度に購入または寄贈・寄託を受けた作品を新収蔵作品展として開催するなど、館の特色や性格をはっきり示すことを目的とした展覧会になっています。本来はコレクションを常に展示しているため「常設」と呼ぶのですが、最近では収蔵作品を持たないためにそもそも常設展示を設定していない館もあれば、当館のように施設の状況によって困難な場合は、「館蔵作品展」や「コレクション展」として年2回ほど定期的に開催することで収蔵作品の紹介につとめたり、コレクションを主に他館等が所蔵する作品を借用して小企画展を開催するなどさまざまな工夫を行っています。

(学芸員 辰巳 充)

編集後記

この冬には珍しく何度か雪の舞う日がありました。この号が出る4月の暖かい春の到来を一層待ち遠しく思う今日この頃です。今回の新年度展覧会案内は切り取って携帯出来るようになっています。卓上に置いたり鞆に入れてたりなど使い方は皆様次第ですので、ぜひ御活用下さい。次回(第9号)は10月に発行予定です。(本館 Y.M)

田辺市立美術館NEWS  
ORANGE Vol.8

発行年月日：平成20年4月1日  
編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館

高村光太郎・智恵子夫妻と佐藤春夫

木彫家高村光雲の長男に生まれ、父の教える東京美術学校彫刻科を卒業して将来を嘱望されていた高村光太郎は期待を一身に担って留学に出ます。しかしニューヨーク、ロンドン、パリでの修行と思索、体験を重ねて帰国した光太郎は光雲二世となるどころか、光雲が頂点の一角を占める既成の日本の美術界に痛烈な批判をあげせかけました。

1910(明治43)年、帰国後間もない光太郎が雑誌「スバル」に発表した批評、芸術家の内面の表現の絶対的な価値を主張する「緑色の太陽」は同世代及び若い世代に熱狂的に迎え入れられました。近代日本の美術が温和な写実的傾向から、その後開花する個性を重視した表現へと流れを転換した、この時代を象徴する一文とその反応だったと言えるでしょう。

同じ時に、洋画家を目指していた長沼智恵子と文学を志していた佐藤春夫も光太郎の芸術と生き方に深く共鳴しました。

光太郎と智恵子は結婚し、後に智恵子は精神の病に倒れますが、二人の生活からは今日にも読み継がれる光太郎の名詩集「智恵子抄」が生まれました。

若き日の佐藤春夫は光太郎の絵画の頒布会に一番に応じ、自身の肖像を描いてもらうために光太郎のアト

工に通います。春夫は生涯に渡って光太郎に深い敬意を抱いていました。終戦後、岩手の山小屋に籠もっていた光太郎を十和田湖畔の彫像制作に向かわせる手紙を書いたのも春夫でした。光太郎は東京に戻り、故中西利雄のアリエで智恵子の面影を宿すその裸婦像を完成させた後亡くなります。光太郎の没後、春夫は「小説高村光太郎像」、「小説智恵子抄」を著して二人の生涯を日本文学の中にしりました。

特別展「智恵子抄～光太郎・智恵子と佐藤春夫～」ではこの高村光太郎、智恵子夫妻と佐藤春夫の交流、そしてそこから生まれた作品の数々を紹介します。(学芸員 三谷 渉)

INFORMATION

会期 / 4月19日(土)～6月1日(日)  
休館日 / 毎週月曜日(但し5月5日は開館)  
4月30日(水)・5月7日(水)  
観覧料 / 一般 600円(480円)  
大学・高校生 300円(240円)  
中学生・小学生 150円(100円)  
( )内は20名以上の団体料金です。  
土曜日は中学生・小学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料です。



1957(昭和32)年、実業之日本社から刊行された「小説智恵子抄」(新宮市立佐藤春夫記念館蔵)。現在は角川文庫の一冊として出版されている。

○「国際博物館の日」記念講演会を開催します。  
4月26日(土)午後2時より当館研修室「最後の芸術——高村光太郎と書」(観覧料のみ必要。手話通訳もつきます。)  
住川英明(書家・鳥取大学教授)

開館10周年記念特別展「渡瀬凌雲展」

熊野古道なかへち美術館は、平成10年10月に町立美術館として開館しました。平成17年5月には市町村の合併にともない田辺市立美術館の分館としてあらたなスタートをきり、本年は開館10周年の節目を迎えます。これを機に、渡瀬凌雲と野長瀬晩花の特別展を開催します。

まず、昭和の時代に日本の南画界の重鎮として活躍した画家、渡瀬凌雲を紹介いたします。凌雲、本名幸茂は明治37年7月9日、父祖の地であった中辺路・熊野を郷里として長野県下伊那郡根羽村で生まれました。

7歳より南画と山水画を習い、早くからその画才を認められ、期待された画家でした。12歳で生涯を通して使用した雅号「凌雲」を与えられました。

長野、静岡、愛知、東京で学業を修め、南画を学んだ凌雲は、大正12年19歳で初めて当地を訪れています。紀南各地を写生した後、翌大正13年には県内の新宮町に転居し、その後約7年間和歌山県内で活動しました。またこの時期、漢詩や書を文人福田静庵に学んでいます。

昭和5年に京都に移り、日本南画院展、帝国美術院展等に出品を続けますが、第14回帝展入選の《采藻》では、日本の美を世界に紹介したドイツの建築家ブルーノ・タウトの賞賛を得、著書「日本文化私観」に掲載されたことから広く名が知られるようになりました。

凌雲は京都を拠点にして作品を発表し、自分たちの時代に相応しい南画を模索しながら、写生や展覧会開催のために中国やヨーロッパ各地を繰り返し訪れました。アメリカでは約1年間滞在して各地で個展を開くなど、昭和55年、76歳でその生涯を終えるまで、南画を積極的に世界に紹介した画家でもありました。

この機会に、より多くの皆様に画家凌雲に接していただけることを願っています。

(学芸員 山本 泰代)



渡瀬凌雲《河口(新宮・熊野川の冬の景)》1932(昭和7)年 熊野古道なかへち美術館蔵

INFORMATION

会期 / 前期: 4月26日(土)～6月1日(日)  
後期: 6月 7日(土)～7月6日(日)  
休館日 / 毎週月曜日(但し5月5日は開館)  
4月30日(水)・5月7日(水)  
※6月2日(月)～6月6日(金)は展示替えのため休館します。  
観覧料 / 一般 210円(160円)  
大学・高校生 150円(120円)  
中学生・小学生 100円(70円)  
( )内は20名以上の団体料金です。  
土曜日は中学生・小学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料です。

教育をしたといいます。18歳で父を亡くした凌雲は、19歳になって初めて父祖の地、熊野・中辺路を訪れました。

この作品は、晩年故郷とのつながりが深くなった凌雲が、依頼を受けて近野小学校創立百周年記念に寄贈した作品です。町の人なら誰でも知っているこの絵にある風景には、本来この位置からは見えないはずの渡瀬家の菩提寺も描かれています。渡瀬家と凌雲にとっては、心の原風景として生涯忘れえぬ景色でした。(学芸員 山本 泰代)

表紙作品紹介

渡瀬凌雲《熊野古道近露野中春望図》

1978(昭和53)年 田辺市立近野小学校蔵

渡瀬凌雲は長野県下伊那郡根羽村で生まれました。渡瀬家は紀州藩勤定奉行のもとで口熊野四番組大庄屋をつとめた旧家でしたが、幕末の変革で信州に移り住み、離郷したことを深く後悔していました。一家はひたすら紀州に帰ることを願ひ、凌雲にはルーツである故郷を誇りとして生きる

田辺市立美術館

H.20	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H.21	1月	2月	3月
	①特別展 智恵子抄 4/19(土)～ 6/1(日)		展示替のため休館	②小企画展 近代洋画 館蔵作品展 6/21(土)～ 7/27(日)	展示替のため休館	③館蔵品展 文人画 館蔵作品展 8/9(土)～ 9/23(火・祝)	展示替のため休館	④特別展 野長瀬晩花展 (前期)10/10(金)～ 11/3(月・祝) (後期)11/15(土)～ 12/7(日)	展示替のため休館 11/4(火)～11/14(金)	年末年始休館 展示替のため及び	⑤特別展 真砂幽泉展 (前期)1/10(土)～2/11(水) (後期)2/21(土)～3/22(日)	展示替のため休館 2/12(木)～2/20(金)	

熊野古道なかへち美術館

H.20	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H.21	1月	2月	3月
	①開館10周年記念特別展 渡瀬凌雲展 (前期)4/26(土)～6/1(日) (後期)6/7(土)～7/6(日)		展示替のため休館	②特別展 谷内庸生展 7/19(土)～ 8/31(日)	※美術館開放講座開催 展示替のため休館	③開館10周年記念特別展 野長瀬晩花展 (前期)10/10(金)～ 11/3(月・祝) (後期)11/15(土)～ 12/7(月)	展示替のため休館 11/4(火)～11/14(金)	資料整理及び展示替 年末年始休館	④館蔵品展 雫賀清子展 2/14(土)～ 3/22(日)				

REPORT 『森のなかで展 —ワークショップ「森にみつけに」』

【日時】平成19年9月22日(土)～23日(日) 【場所】熊野古道なかへち美術館・周辺

熊野古道なかへち美術館では、「森のなかで」展にあわせて、出品作家の押江千衣子さんをナビゲーターに迎えたワークショップを行いました。山や森に囲まれた美術館を拠点に周辺を散策し、見て、触って、体感できたものを材料に、既成の枠にとらわれない作品を作ろうというもので、参加者は、田辺市内では本宮町や芳養町から、遠くは和歌山市や大阪から集まった9歳から40代の大人までの11名。押江さんの指導で、いつもとは違い思い切り描いて出来上がった自分の作品に、みんなとても嬉しそうでした。また、押江さんの作品や制作過程を実際に目の前にした小学生からは「うわーすごい上手、天才や!」の声も飛び出し、子どもも大人も、楽しくつろいだ交流の中で多くを学んだ2日間でした。(学芸員 山本 泰代)



押江千衣子さんの話に耳を傾ける参加者

REPORT 『創画会60年展』記念講演会・公開対談

日本画の現代的な表現を追求し続ける画家たちの団体、創画会の60年を振り返る展覧会が昨年9月から今年3月にかけて当館を含む全国5会場で開催されました。当館には60年の間に発表された会員たちの力作72点を一度に展示するスペースの余裕がなく、途中で展示替を行って紹介しました。前期、後期、それぞれの会期中に講演会と公開対談を開催し、画家の考えを直接お聞きする機会をもつことができました。

展覧会が始まって間もなくの10月27日にお越しいただいたのは創画会理事長の上村淳之さんでした。パリでの個展開幕から帰られたばかりという上村さんでしたが、自身が体験された創画会の60年(上村さんのご尊父、上村松篁は創画会の原点となった団体、創造美術を1947年に結成した画家の一人です)から今後の見通し(この展覧会は「起・承・展」の3章で構成されましたが、上村さんの演題は「起承転結」でした)まで、また自身の制作にまつることなど、盛りだくさんの事柄を一気に話してくださいました。最後に出た質問に対するお答えでは、東洋絵画の特徴である「余白の美」にまで話が及び、短い時間でしたが、たいへん充実した内容でした。

会期終了まで2週間ばかりとなった12月8日には、創画会の最も若い世代の会員の一人である宮いつきさんと、この展覧会の監修にあたっていただいた跡見学園女子大学准教授の杉本昌裕さんにお越しいただいて公開対談を開催しました。お二人は東京芸術大学の神田一穂教室の同窓で、対談も打ち解けた雰囲気の中で進みました。日本画を学ぶようになったきっかけや、師から受けた教え、自分が教える立場になって思うことなどを、現代の日本画の問題とからめながら語り合っていたり、興味深く貴重な内容の話がうかがうことができました。

創画会の全面的なご協力によって開催できたこの講演会と対談によって、展覧会の内容がますます豊かなものとなりました。(学芸員 三谷 渉)



記念講演会「起承転結」



記念公開対談「これからの創画会」